

「聖霊のみわざ」(要旨)

聖書箇所：テトスへの手紙3章5~6節

【1】 クレタ島に残ったテトスへ

パウロはエーゲ海のクレタ島に残って仕事をしていたテトスに手紙を書き送りました。同島にはユダヤ人が多く居住しており、たくさん町がありました。町ごとに信頼できるキリスト者の長老を任命すること、それがテトスに課せられた仕事でした。教会の中には、「神を知っている」と公言しながら行いでそれを否定する者が多くいました。教会は「反抗的な者、無益な話をする者、人を惑わす者たち」に振り回されていたのです(テトス 1:10~16)。こうした課題を抱えるクレタ島の教会のために、パウロは「同じ信仰」をともにするテトスに手紙を書き送りました。

【2】 「クレタ人はいつも嘘つき」

「クレタ人はいつも嘘つき、悪い獣、怠け者の大食漢」(同 1:12)。紀元前 600 年頃のクレタ島出身の詩人エピメニデスが残した言葉です。驚くべきことに 600 年の月日を経てもなお語り継がれて来たのです。その背景には、クレタ人はずっとクレタ人、人は結局変わらないという考えがあったのでしょう。パウロはそれを踏まえた上で、すべての人は救われ、その生き方は変えられると語ったのです(同 2:11~13)。目の前の人たちに心悩ませるテトスには、「私たちも以前は、愚かで、不従順で、迷っていた者…」(同 3:3)であったことを思い起こさせます。そしてそんな私たちが救われたのは、偏(ひとえ)に「神のいつくしみと人に対する愛が現れた」(同 3:4)からであったと続けます。

▷人は受け入れ難い相手を前にすると、「あの人と自分は違う」と考え自分を納得させることがあります。パウロは神の愛を受け入れる前の自分の姿を思い出すよう促します。

【3】 聖霊のみわざ

パウロはかつて自分の力や努力で神に認められる人間になろうと励んできました。真面目にそれと向き合えば向き合うほど罪の意識が生じ、それを突破できない自分に苦しんできました(参照ローマ 3:20)。そんなパウロがキリストの福音を知ります。彼は自分の義を追求する者から、「キリストの恵みによって義と認められ、永遠のいのちの望みを抱く」(テトス 4:7) 者へと変えられたのです。

福音を受け入れたパウロは言いました。「神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみによって、聖霊による再生と刷新の洗いをもって、私たちを救ってくださいました。」(同 4:5)

この「再生」(バプティスマ)には「新生」という意味があります。聖霊によって古い人から新しい人へ新しく生まれ変わるといことです。「刷新」(アカイノシス)は「心を新たにす」(ローマ 12:2)と言い換えることができます。新しい心に、新しい人にリニューアルされるということです。次第に「新しくなる」ではありません。聖霊のみわざによって一新されるのです。

▷私たちは自分で自分を変えよう、成長しよう、新しい自分になろうともがいてはいませんか？ 私たちには、自分をも他人をも新生させる力はありません。聖霊なる神がそれをなさいます。聖霊のみわざに信頼し、良いわざに励もうではありませんか。

